



障害をもつ幼児の保育(24)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

水——なぜこんなにも水遊びが好きなのか

「水遊びばかりやって」という大人の声

なことはありませんか。

F 子どもはどの子も水遊びが好きですけれど、とくに愛育学園では好きな子が多いですね。朝からずっと水遊びをしていて、それが長く続くこともありますね。それにたいして何か周囲から批判のよう

M 批判というより心配する親もあります。「水遊びばかりやっていては体験が片寄るのではないかなど尋ねられることはしばしばです。」

F それにたいしてどのように答えるのですか。
M 私は『子どもが自分からはじめたことはどん

なことでも、意味がある』と話しています。大人には、形にならないことは分かりにくいし、その子に与つての意味をくみ取りにくいのです。それをどうやって分かるようにするかは、私たち専門とする者の大事な仕事だと思えます。多くの人に分かってもらうには、言葉で説明するだけでなく、ビデオなども有効なときがありますね。親たちは焦つたり戸惑つたりする気持ちもあるでしょうが、子どもの心の深いところを見ることに慣れていないのです。

その意味で、『形が残らない造形活動』（註）ビデオはととてもよかつたと思います。

『形が残らない造形活動』のビデオ

（水のビデオ）が教えてくれること

F あのビデオを久しぶりに昨夜見ました。子どもの視点で水がどのように見えるのか、子どもを出さないで語ろうとしているのです。いつも子どもが

やっている水遊びをこのような形で見せられると、本当に美しいし、意味のあることだと分かつてきます。

M 『生成展』のときあのビデオを見て、愛育に來はじめたころのJ君のお父さんが、感動して納得してくれました。お母さんに電話をしてお母さんもすぐに見に来てくれたことは忘れられませんね。

F 玉杓子のうちがわに当たつた水が八方に散る様子。さざ波のようにコンクリートのうえを次々流れる水。マンホールの蓋のうえに飛び散る水。外の梁に水を当てて滴となつてしたり落ちる水滴は、まるで今生まれた水の坊やみたい。言葉でこのように説明しても尽くせない美しさと、子どもの心を表すものがありますね。

M 子どもたちの水遊びに打ち込む気持ちが分かります。

このビデオとともに作られた、西原彰宏、山田陽

子他のOMEPP世界大会論文には『力強さ、激しさ、おだやかさ、優しさの感覚を、水と一体になつて表現する体験』と書かれ『生きていくことの感覚を明確にしているのではないか』とも書かれています。これは本当に共感出来ます。

『イメージ』と『認識』との違い

M 愛育で子どもたちがやっている水遊びは、全身を打ち込んでやっている水遊びです。小手先の問題ではなく自分が水と一体化して遊んでいます。

F 子どもが水と真剣に遊ぶとき、その感じている世界は言葉では表わせないですね。イメージとか感性は流れる水のように拡散してしまうようです。でも、そんなふうを感じる自分を長い時間をかけてしつかり認めることで、自分というものが出来ていくと思います。どうでしょう。

M そうね、感性と認識、知識とは違いますね。こ

の子たちは感じる力が人一倍繊細で豊かです。感じたことを言葉で表そうとすると、生きていたものが動かなくなり、この子どもたちの感じていたものは離れてしまう。繊細な感覚のこの子たちは体全体で感じたことを言葉の枠の中に入れることはできないのでしよう。

F ああ、それが気がついたのですが、このビデオに出て来る水遊びの主人公たちはどの子ども言葉が出ていません。いわゆる自閉症といわれる子どもたちです。

どうして言葉が出ないのかは分かりませんが、言葉を使わずに水遊びの中で自己の確認をしたり、心



の表現をしているのですね。『言葉をもたない詩人たち』です。

子どもにとって

言語表現を超える遊びの中の表現

M うちの孫の一人のT夫が一歳半ころ、家の引越して落ち着かない時期、新しい家の隣家から度々「子どもの声がうるさい」と苦情が来るということがあったでしょう。

F そうそう。

M あのあと親子ともに不安定になったとき、T夫は「キーツ」というばかりで言葉が出なかった。

暑くなって窓を開けるころが一番大変で、隣家から苦情が来るので暑い中を自転車に子どもを乗せて母親が連れて歩いていたのですね。

それで、アセモが背中に出来ていた。何とかしなくてはと、私が訪ねて行くとお風呂場で水遊びを何

時間もしたけれど、それは激しい水遊びだった。風呂桶の縁から飛び込むバシャンという音がして水が飛び散り、お風呂場の前まで水浸し。幸いお風呂場は隣の壁が厚くて音が漏れなかったけれども、家中には相当響いていた。でもその水遊びでT夫は落ち着きを取り戻したのです。

F一年以上かかりましたね。

M 母親はあまりの激しさにはじめは「それは、やらせないで」と言ったのです。

日常の生活から見ると、あまりに逸脱しているように見えたのでしょう。でも、それを機会に父親も年上のきょうだいたちも幼いものにたいする見方が変わりました。

F 数週間たって私が訪ねて行って水遊びをしたとき、蒸し暑くて一時間以上したら私の方がもう耐え難くなりました。それで「もう、おしまいにしよう」といってお風呂から出そうとしたら、T夫が

「キー」と言ったのです。上の女の子が来て「自分から出たがらないのに出そうとしたらだめなの」「ジージー（祖父）はそんなことしない」（笑い）と教えてくれました。

大人が表現をうけとることは、

子どもの自己確認につながる

F それから二年以上経って、先日、この四月から幼稚園に行くようになったT夫の家を訪ねたとき、入園式の翌日で少し緊張して帰ったところでしたが、お風呂場で水遊びをやりました。このごろはあまり水遊びはやらないと聞いていたのに……。

昼間なのに電灯をつけて水しぶきをあげてお風呂に飛び込むと、水しぶきが美しく輝くのです。私も見ていてつくづく素敵だと思いました。

子どもは夢中になって遊んでいて、水という物質と一体になっている。意識して表現しようとして

やっているのではないのに、私に「見て、見て」としつこいくらい言うのはなぜかと思いました。

M 見るものと見られるものと……慈しんで見るものがあるから見られている自分を『よきもの』として感じることができる。水遊びのやり方は子どもによつてそれぞれ違うけれど、やらせたままにしておくことはありません。一緒になって濡れながら、その子の見ているものや感じているものに、共感している大人がいることが大事なのです。

註 渋谷のギャラリーで愛育の子どもたちの作品を集めて『生成展』（一九九五年）をしたとき、形にならない造形活動として子どもたちの水遊びをビデオに収めて会場に流した。（西原彰宏、持丸和子、その他沢山の職員がかかわって作った）

その後OMEP（世界幼児教育機構世界大会）にも理論的な部分を加え、深めて英文で発表した。